

としょぶらり

米子高専図書館情報センター報

ISSN 1344-5634

第 86 号

平成 20 年 12 月 10 日発行
米子工業高等専門学校
図書館情報センター



ブックハンティングによる新着図書

目次

平成20年度 第35回 校内読書・エッセイコンクール優秀作品発表

【読書感想文の部】

最優秀賞	建築学科	1年	中西 和	佐賀のがばいばあちゃん ……………2
優秀賞	電気情報工学科	1年	植田 大貴	「コルチャック先生」を読んで ……………3
優秀賞	物質工学科	1年	中尾あかり	「博士の愛した数式」を読んで ……………4
佳作	電気情報工学科	1年	木村 勇太	図書館戦争・図書館内乱 ……………5
佳作	電子制御工学科	1年	長谷川直孝	ネバーランド ……………6
佳作	物質工学科	1年	浅中 美有	星の王子さま ……………7
佳作	建築学科	1年	遠藤 貴子	星の王子さま ……………7

【エッセイの部】

最優秀賞	電気情報工学科	1年	松井 宇海	私の小さな旅 ……………8
優秀賞	電気情報工学科	1年	松本 凌	わさび ……………9
優秀賞	建築学科	1年	安森 未央	意味のあるもの ……………10
佳作	機械工学科	1年	福本 千等	ライバル ……………11
佳作	電気情報工学科	1年	上本 光太	社会問題について思うこと ……………12
佳作	物質工学科	1年	福本 友法	今を生きる ……………13
佳作	建築学科	1年	原田 小鈴	エコとの関わり-上手なエコ- ……………14

新着図書紹介 (ブックハンティング、各科・一般科目推薦) ……………15
情報教育・情報ネットコーナー/利用マナーについて ……………16

平成20年度（第35回）

校内読書・エッセイコンクール優秀作品

読書・エッセイコンクール講評

図書館情報センター長 永井 猛

校内読書エッセイコンクールも35回目を迎えました。今年は感想文の部に143編、エッセイの部に58編の応募がありました。例年に比べ、応募者のほとんどが1年生で、入賞者が1年生で占められたのは、初めてのことでないでしょうか。次年度は是非とも2年生以上の奮起を期待したいと思います。

感想文の最優秀賞に選ばれた「佐賀のがばいばあちゃん」は、原作の持つ前向きな生き方への共感が素直な筆致で描かれ、「いい人生」とは何かを考えさせてくれます。優秀賞の「『コルチャック先生』を読んで」は、大人と子供の溝を埋める方法、「博士の愛した数式」は恋愛とか家族愛とも違う不思議な愛情の存在を原作から読み取っています。

佳作の「図書館戦争・図書館内乱」は、検閲がなく自由に本が読める喜びを、「ネバーランド」は寮での共同生活を通して成長していくかけがえのなさを綴っています。佳作に「星の王子様」が2点選ばれましたが、浅中さんは「大切なことは目に見えない」という心でものを見る大切さを、遠藤さんは、知らないうちに頭でっかちな大人になっている反省を書き留めてくれました。

エッセイの部の最優秀賞「私の小さな旅」は、非日常の時の流れに身を置く心地よさ、そして解放された心に映る風景の美しさが的確に表現されており、秀逸でした。優秀賞の「わさび」は、サービス精神に富む筆致でぐいぐい読者を「わさび」の世界に誘う、なかなか練れた文体です。同じ優秀賞の「意味のあるもの」は大切な人を失う辛さから「出会い」そのものの意義を考えています。

佳作の「ライバル」はアルバイト先での有益な体験を、「社会問題について思うこと」は地球温暖化を、「今を生きる」は記憶障害の子供の言葉から自分の生き方を、「エコとの関わり-上手なエコ-」は身近に出来る資源保護対策を記してくれています。

このコンクールを通して、多くの本と出会い、種々のものの見方を身につけていって、高専生活を豊かなものにしていただきたいと思います。

読書感想文の部

最優秀賞

佐賀のがばいばあちゃん

建築学科1年 中西 和

私はこの夏休みに「佐賀のがばいばあちゃん」を読みました。島田洋七さんの作品で、テレビドラマなどで話題になったものです。

昭和三十三年、八歳の昭広は広島から佐賀の田舎に預けられました。そこでは厳しい戦後を七人の子供を

抱えて生き抜いたがばい（すごい）祖母との貧乏生活が待っていました。初めは寂しさと不安を感じていましたが、祖母と暮らすうちに現実と向き合い、ド貧乏ながら、笑いの絶えない楽しい生活を送ることになるのです。

この本を読んで私はびっくりしました。今まで貧乏は不幸なことだと思っていました。もし自分の家が貧乏になったらどう生きていけばいいんだろうと思ったりしたこともありましたが、本に出てくるばあちゃんは前向きで自分の生き方に自信を持っていました。そして本に出てくる人々は、あまりお金を使うことはありませんでした。例えば家の前の川の水面すれすれに一本の棒を渡していました。上流に市場があり、二股になった大根やまがったキュウリなどがその棒に引っかかるのです。ばあちゃんはその野菜を見

て、

「二股の大根も、切って煮込めば一緒。まがったキュウリも、きざんで塩でもんだら同じこと。傷んだところだけ切って使ったら同じ。」

と言います。おもしろいと思いました。どこまでも明るいばあちゃんだと思いました。昭広もおやつは木の実で十分だと言っていました。都会とは違い自然の中でいくらでも遊べていつの間にか夕暮れになっている、そんな楽しみ方ができたようです。ばあちゃんは昭広が金持ちになれたらいいねと言うと、

「うちは明るい貧乏だからよか。それに先祖代々貧乏だから心配せんでもよか。ああ、貧乏で良かった。」

と答えたそうです。貧乏で良いことなんてあるはずがないと思っていました。お金がないよりはあるほうが楽しく暮らせると思っていました。でもばあちゃんは、金持ちはいいもの食べたり、旅行に行ったり、忙しくて大変だと言っていました。貧乏なら、泥棒に入られても、何も盗られる物がなくて、逆に何か置いて行ってくれるかもしれないとまでも言っていました。私は、読んでいるうちにこの暮らしに憧れていました。どんなに辛くても、悩み事があっても、そんな無駄なことしてるのはつまらないと思えるのではないかと思います。お金がある人は今の暮らしをし続けるためにはけっこう大変で、失敗してしまうと、貧乏な暮らしが辛いと思ってしまう。もともと貧乏なら、今の暮らしよりも悪くなることはないし、むしろ良くなっていくかもしれません。そう考えると、そんな貧しい暮らしをしているほうがたくさん夢が持てるのではないかと思います。昭広も、野球部に所属してプロ野球選手になりたいという夢を持っていました。将来への不安も少しはあるかもしれないけど、希望のほうが多いだろうと思います。

そしてこの本を読んで心に残ったことは、昭広とはあちゃんの周りの人々の思いやりです。昭広が小学生のときの運動会で、一人でご飯に梅干しとショウガという質素なお弁当を食べようとしていたら、担任の先生がお腹が痛いのでお弁当を交換しようと言いました。交換したお弁当の中には、卵焼きやウィンナーやエビフライなどの料理が詰めこまれていました。そして次の年もその次の年も運動会の日になると先生は腹痛をおこしたふりをして昭広とお弁当を交換しました。昭広は先生達の芝居に気付かず、嬉しそうにお弁当を食べました。本当の優しさとは、他人に気づかれずにやることなんだとばあちゃんは言いました。本当にそうだなあと思いました。相手に感謝されたいとかいう気持ちがあると、逆に相手の重荷となってしまう

ます。他にもたくさん思いやりのあるエピソードがありました。でも、どれもばあちゃんが明るく前向きだったからだだと思います。親しみやすい人柄が周りに良い人々を引き寄せたのではないかと思います。

この本のあとがきに「いい人生」というのが書かれていました。明るい貧乏と言って、笑っていたばあちゃんは、負け惜しみではなく、本当に幸せそうだったといいます。起こった出来事を楽しみ、目の前にあるものをおいしく食べ、毎日を笑って暮らす、そんな生き方をしたいと思いました。

優秀賞

「コルチャック先生」を読んで

電気情報工学科1年 植田 大貴

大人の考え方と子供の考え方。同じ一つの事柄に対してのものでも、その見解やとらえ方はまず一致することはありません。故に思春期にさしかかった頃から、親子の対立や衝突が毎日のように繰り返される。これは決して珍しい事でもなく、ごく一般の家庭のよくある日常の風景の一つだと思います。

ここで僕が思うのは、なぜ大人達はこうも自分の凝り固まった固定概念や既成事実、あげくには考えの理想郷を押しつけて、その考え方で子供を縛ってしまいがちなのかということです。大人だって昔は子供だったはずなのに「大人」になってしまうと子供のことを小馬鹿にして、子供の意見や主張に耳を傾けてさえくれなくなります。僕はそんな大人の考え方や生き方が本当に嫌ですが、僕も大人になれば、そうなることは仕方のないのかと思っていました。

そんなとき手にとって読んだのが、この本でした。子どもに対しての教育とはどうあるべきかや、教育そのものに従事したコルチャック先生がどのように子ども達と共有の時間を過ごしたかなどが書かれていました。

その中でも僕が最も興味をもったのは、コルチャック先生の教育法の中にあった、「子どもの裁判」というものでした。これは、形態は子どもが子どもを裁くという裁判ですが、これは子どもを一人の人間として尊重し、子どもの自発性を根幹にすえるという教育法でした。

子どもには子どもの考え方があって、それを大人

が理解するという事はやはり難しいことだと思います。大人になるにつれて積み重ねられた子どもとの年の差が、そのまま心の差を築いてしまうからだと思います。だから、この心の差を埋めない限りは、大人が子どもを理解することはないでしょう。

だからこそ、コルチャック先生は大人ではなく子どもの問題は子ども自身に解決させることによって、お互いの気持ちを尊重し、相手のことを理解しようとするを実体験させたんだと思います。ここで僕がコルチャック先生を尊敬した点は二つあります。一つは、大人と子どもの考え方は決定的に違うということを確認したうえで、子どもに自分自身の考えを押しつけて、あくまでもそれが正しいという主張をするのではなく、理解できない大人が一步引いて子ども達にまかせて、それを見守ろうとしたところです。僕はここから、やはり大人と子どもがお互いの考え方をすべて理解することは難しいと思うので、分別のある大人が一步引いて、子どもの主張を尊重しつつ見守ってくれることが、いちばんありがたいことだと思いました。

二つめは、コルチャック先生自身が大人であるにもかかわらず、子どもの人権を尊重し、子どもと同じ立ち位置、目線で子どもと接していたところです。これは、昔は子どもであったはずの大人が最も忘れてしまい、できなくなってしまうことだと思います。

大人になると、変にプライドができて、子どもと衝突したときに、「子どもになんて何がわかる」や「所詮子どもの言うことだから」と、頭ごなしに子どもを否定し、子どもの意見に耳を傾けることすらなくなります。そんな大人が世間一般的ななかでのコルチャック先生の子どもの対しての接し方は、子どもには子どもなりの考え方や主張があって、それが自分達大人の価値観にあてはまらないからといって、それをすべて否定してしまうのはおかしいと思いました。

価値観が違うからこそ、相手側に立って、それを理解することが大切なのではないか、と訴えかけているように思えました。

このように、コルチャック先生は世間一般の型にはまった考えに基づく教育ではなく、自由にお互いを尊重しあう教育運動に関心をもっていました。僕はこの考え方に深く感銘を受けました。

現在の日本の教育方針は全員が決められた範囲のものを決められた期間です。では、それを決めるのは誰か、やはり、大人です。

そこには子どもの主張や意見が関与できる隙間は一切ありません。僕は近い将来の日本の教育にそのような子どもの意見を反映する仕組みができれば素晴らしい

いなと思います。

最後にこの本を通して最も僕が思ったのは、やはり子どもは「自分の気持ちを聞いてくれる大人を探している。」ということです。

ただ、二十歳になったから「大人」ではなく、いつか自分が大人になったと実感できたときに僕はそんなコルチャック先生のような大人になりたいなと思います。

「博士の愛した数式」を読んで

物質工学科1年 中尾あかり

私は、「博士の愛した数式」という本を読みました。

記憶が八十分しかもたない老数学者「博士」と、家政婦の「私」とではじまった新しい生活。博士にとって「私」は、常に、新しい家政婦。博士は、初対面の「私」に、靴のサイズや誕生日を尋ねます。数字が博士の他人と交流するための言葉だったのです。やがて、「私」の十歳の息子（のちにルート）が加わり、ぎこちない日々が、驚きと歓びに満ちたもの変わっていきます。家族でなくても、恋人でなくても、人と人とは慈しみあえる…悲しくも暖かい、奇跡の愛の物語です。

私がこの本を読んで、まず最初に思った…というか考えたのは、記憶が八十分しかもたないというのはどんな感じなのか？ということでした。どんな感じなのかというと人事になってしまいますが、本当に素直にそう思いました。博士はメモを体に貼りつけて生活しています。もっとも重要な、「僕の記憶は八十分しかもたない」というメモは、一番目立つ場所に貼られています。毎朝、目覚めるたびに、自分の病を、自らが書いたメモによって宣告されるのです。そのときの博士はどんな思いなのか、考えると、残酷で、胸がしめつけられるようでした。

この本の中には、時折、数学や数字に関することがたくさんでてきます。「私」の誕生日からくる二百二十と、博士の腕時計に刻まれた番号二百八十四がまれにみない友愛数だということ、二十八の約数を全て足すと二十八になる完全数だということ、三角数の美しさ、博士がメモに残した $e^{\pi i} + 1 = 0$ オイラーの定理などです。博士は、なにげなく見た数字や、聞いた数字につながりを見つけます。数学を愛していた博士だからこそ普段の生活の中のものまでも数学にむ

すびつけて話すことができたのでしょうか。私は本の中で出てくる運命ともいえる友愛数の組み合わせや、身近にもある完全数の存在、公式の美しさに、驚くとともに、感動しました。数字は私たちの身の回りにたくさんあります。広告のお肉の値段、カレンダーの日付、時刻…身近にあるのに自分では気にもかけないからこそ、博士の発見や発言一つ一つにわくわくさせられました。本を読んでいくうちに、数学に魅力さえ感じました。

博士は、数学と同じくらいの愛情を「私」の息子にも注いでいました。「私」のためにはやらないこともルートのためならやっていて、ルートの前では、きちんとやっていて、ルートのためなら自分のこだわりもあっさり捨てました。そういうところから、この物語で博士は、小さき者の正当な庇護者でもあったのだととらえることができます。

物語の中で、ルートと博士は同じ阪神タイガースファンでした。しかし、博士の知っている阪神は一九七五年で止まっています。博士の中でのヒーローは江夏豊です。だから、「私」とルートは江夏に関してだけは博士に嘘をつき通そうと約束しています。ルートは博士のために、できるだけ博士と同じ記憶を共有できるように、本を調べ、江夏に関する情報を手当たり次第に手に入れ彼なりに努力をしていました。そこでわかったのは、江夏豊の背番号は二十八だということ、完全数二十八を背負った選手だったのです。

ここまでくると、物語の中で、博士と「私」とルートと数学と阪神タイガースが絶妙なつながりを持っていることがわかります。さらに江夏豊の背番号が完全数二十八という、数学との結びつきができます。この奇跡によって、三人と数学、阪神タイガースという主役達が一気に結びつき、たしかなものになっています。

この作品には、作者の数学への愛情、数学美への心酔がちりばめられているのでしょうか。記憶をなくし、身の回りのことも、自らでできない、哀れともいえる博士が、実はとても幸せだったのだと、読み終えた後に感じさせるのは、作者ならではの工夫がしてあるからではないでしょうか。

この作品の中の、三人の間に芽生えた、恋愛とも、友情とも違う、家族愛とも敬愛とも少し違うなにか、奇跡の愛の暖かさを作者は伝えたかったのかもしれない。



佳作

図書館戦争・図書館内乱

電気情報工学科1年 木村 勇太

私がこの本を読んだきっかけは、書店で偶然この本を見かけ、手に取り試しに読んだとき、目次の部分に興味を惹かれたからだ。その目次というのは、知っている人はあまりいないと思うが、実在する「図書館の自由に関する宣言」と全く同じだった。これがこの本を読もうと思った大きな理由だ。また、著者が川浩、という名前を知っていたというのも理由の一つかもしれない。

実際に読んでみると、やや強引な部分もあったが、すぐに本の世界に引き込まれた。読んでよかったな、と心から思える本だったと思う。

この本ではある団体の検閲から本を守る、というのが一つの大きな流れなのだが、この本の登場人物たちは、文字通り「命懸け」で図書館、本を守る。私も読書はジャンルを問わず大好きなのだけれども、おそらく本がなくとも生きていけるだろうし、登場人物たちと同じ立場ならば、ものすごい勢いで逃げるか、隠れると思う。そんな自分から見ると、主人公・教官たちが全力で検閲から本を守る姿は、かっこよく、そして眩しかった。

この本の中で考えさせられた言葉がある。それは「本を焼く国はいずれ人を焼く」という言葉だ。本を焼いてしまうということは、危険な思想を排除していく、ということと同じだと私は思う。つまり、「政府が国民の心を統制する」ことだと思う。こんなことをすれば国が焼ける、滅びるのは歴史的に見ても（カンボジアのポル・ポトのような例もあるので）当然だと私は感じた。

また、これはセリフではないのだが、「正義感からの批判」ということが皮肉っぽく書かれていた。これはどういうことかということ、物語ではある聴覚障害をもつ学生に、昔から知り合いの図書館の人が聴覚障害のあるヒロインの出てくる小説をすすめる。そしてそれが噂として広まり、当の本人は感動して読んでいたのに、第三者が差別問題だと騒ぎ立てたことによって、大きな問題になってしまう。やはり、本人たちの気持ちを知らないで個人の正義感を振りかざすというのは間違っていると感じた。これは誰もが陥ることのある問題だと思った。

ところで、この本は「メディア良化法」という（検閲を合法化するような）架空の法律が施行されたという設定だが、現在の日本でも同じことがあり得ると思う。例えば「人権擁護法」だ。これは廃案になったからいいものの、もし可決していけば、銃器を扱う、暴力的なシーンがあるなどの理由でゲームや本、映画などを規制することのできる、まさしくこの本と同じ、悪夢のような世界になるかもしれない法案だった。なのでこの本に出てくる内容というのは、決して違う世界の作り話などではないと思う。

本の中でこの、メディア良化法という法律ができた背景には、行き過ぎた報道や、国民の政治への無関心があるからだ。この辺りも今の日本と被る部分があり、考えさせられると思う。

この本を読んだあと、自分の生活を少し考え直せたと思う。本がなくとも生きていける。しかし、本がある国からそれを無理やり無くすということは、絶対にしてはいけない、許されてはいけないことだと私は思う。もしもそんなことをしてしまえば、間違いなく不幸な結果になる。

実際にはこんなことが起きることはないのかもしれない。それでも、これからは、自分の住んでいる国に対してもう少し関心を持って、そして、本を大事にしていきたいと心の底から思う。

最後に、目次に使われている「図書館の自由に関する宣言」を。

- 図書館は資料収集の自由を有する。
- 図書館は資料提供の自由を有する。
- 図書館は利用者の秘密を守る。
- 図書館はすべての不当な検閲に反対する。

○図書館の自由が侵される時、我々は団結して、あくまで自由を守る。

ネバーランド

電子制御工学科1年 長谷川直孝

夏休みの期間を利用して高専生になってからはあまり読まなくなった小説を読んでみることにした。選んだ本は恩田陸の「ネバーランド」だ。

この作品は、伝統ある男子校の「松籟館」という古い寮が舞台で、四人の少年が冬休みにそこへ居残りをし、「告白ゲーム」というものをきっかけに彼等の隠していた秘密が次々と明らかになっていくという内容

である。

まず読み終わって真っ先に思ったことは、大変読みやすかったということだ。物語の舞台は松籟館の中だけで、主な登場人物も四人と少なく、情景を想像しやすかったので、自分の心が本の世界に、すっ、と入っていった。さらに、このような単純な設定から展開されてゆく物語には、様々な謎がひそんでいて、またしても自分の心を大きく引きつけてくるのだ。

物語に登場する四人の少年の名前は美国、寛司、光浩、統で年齢は十六、七歳なのだが、彼らの言動は驚く程大人びている。それが最もよく現れているのが六日目の美国、寛司、光浩の三人で結婚について語り合っている場面で、両親が離婚調停中の寛司が言ったことだ。それは、結婚とは「二人でするビジネス。生産力を上げて利益を出さなきゃならない。互いの相性がよくて、能力をうまく補充しあえれば、愛情とか快樂とか、たくさんの副産物も受け取れる。子供だって生産物の一つ。保険にもなる。子供に設備投資して、将来、より多い利益を出させる」といった内容であり、最初これを読んだ時、寛司がそう言った後に美国の感じた「夢が無い」に同感だったが、自分と歳が一つしか違わない人の言えることではないと感心した。

しかし、まだ高校生ということもあって精神面の弱さや、幼さも目についた。一つ例を挙げてみると、三日目の四人で将来のことを語り合う場面で、統と光浩が喧嘩をしたことだ。勿論、挑発した統も子供染みたところがあつたと思うけど、光浩も辛い秘密に触れたとはいえ、取り乱して統に殴りかかったところは、まだまだ精神的に弱いのではないかと思った。

この物語の見所は、そんな大人びていてしっかりした面と子供の様であり、どこか頼り無い面を併せ持つ彼らが共同生活によって、自分の過去や現在と向き合っていく少しずつ成長していくところだと思う。特に、想像を絶する過去を持つ光浩が「告白ゲーム」によって秘密を告白し、その後どう変わっていくかが一番の見所だと思う。

僕が思う著者の優れているところは、読み手を飽きさせない物語の書き方が上手いという点だ。何故そう感じたかと言うと、シリアスな場面になったかと思うと次の日には、皆で楽しくテニスをして良い汗を流したりと、少年達の本来持っている爽やかさと暗い部分とを互い違いに持ってきていることで、物語に絶妙な起伏が生まれ、そこに読み手は愉しさを覚えていくからだ。

最後に、読み始めてからずっと気になっていたこの本の題名「ネバーランド」とは本文中の四日目に美

国が心の中でつぶやいたことそのものだと思った。その言葉というのが、「この一見乱雑でどうしようもない世界では誰もが対等だ。それでいて、親も教師も侵すことのできない一種の聖域なのだ。この学校に、松籟館に一步足を踏み入れた瞬間にだけ現れる、どこにもない国」である。つまり、「ネバーランド」とは美国、寛司、光浩、統の四人が松籟館で過ごした、もう二度と戻って来ることのない時間そのものだという事だ。そのことに初めて気が付いた時、時間がどれだけ貴重なものかということ深く考えさせられた気がした。そして限りある時間の中で出来るだけ多く、この物語の四人のように一生心に残るような経験をしていきたいと思った。

星の王子さま

物質工学科1年 浅中 美有

私はこの「星の王子さま」という本を、小学生の頃に一度読んだことがあります。その時は特に何も感じず、ただ単純に、大人は想像力に乏しいという事が書かれているとしか思いませんでした。しかし、何年かたった今、読み返してみると、簡単そうに見えるこの本の深さが少し分かったような気がしました。この話はこのようにすすんでいきます。

主人公の「ぼく」は6歳の時、大蛇に飲み込まれた象の絵を描いたが、大人たちはみな理解しようとしなかった。彼は画家を諦め、飛行機の操縦士になった。そしてある日、サハラ砂漠に不時着陸してしまう。壊れたエンジンを直していた彼は一人の少年と出会った。その少年は小さな星から来た王子さまだった。王子さまは世話をしてきたバラの花との、いさかいをきっかけに、その星を出ることを決心し、いろいろな星に住む人を訪ねる。人一人しか住めない小さな星に住む王様。自分を褒めたたえる言葉しか耳に入らない大物気どりの男。恥ずかしいのを忘れるために飲み続ける酒びたりの男。一年中仕事をしている実業家。一分に一周する星の点灯人。どの星を訪ねても「大人って変だな」と思うばかりだった。しかし、次に訪ねた星に住む地理学者に「はかないということは、そのうち消えてなくなる」ということを教わり、星に残してきたバラの花もいつかは消えるのかと胸を痛めた。

最後に訪れた地球でもいろいろな体験をした。そして一匹のキツネと出会い、「一番大切なことは目に見

えない」ということを教えられる。王子さまは、星に残してきたバラの花が自分にとって何よりも大切な存在だということに気づき、星に帰る決心をした。

飛行士と王子さまは、話をするうちにお互いの心を通い合わせていた。飛行機の修理が終わった夜、王子さまは、「大切なことは目に見えないんだよ」という言葉を残し、消えていった。

というものでした。

私はこの本を読み、「一番大切なものは目に見えない」という言葉がとても心に残りました。私の大切なものはなんだろうと考えた時に一番初めに出てくるのは友達でした。友達は目に見えるのにどうしてか考えました。友達というのは、外見じゃなく中身を見ているんだと思います。その人の性格、気持ちなど目に見えないのが見えるようになってこそ友達といえるのではないかなと思いました。また、友達とはたくさんの思い出があります。思い出は写真にも残せませんが、やっぱり心の中の思い出が一番で、これも目には見えないものです。「一番大切なものは目に見えない。」本当にその通りだな、と思いました。

小学生の頃読んで感じなかったことを、今感じる事ができたのは、いろいろな体験をして、本当に大切にしたいと思える人ができたからでしょうか。

この本は、読む度に様々な解釈ができ、たくさんのことを考えさせてくれる本です。また、自分の成長や変化にも気づくことができる本でもあると思います。

サン・テグジュペリがこの作品のテーマとした「大人は、物そのものを見ようとしな。肝心なことは目に見えない。」という言葉をしっかり胸に刻み、心でものごとを見ることができるよう大人になりたいと思いました。

星の王子さま

建築学科1年 遠藤 貴子

一九四三年四月に、サン＝テグジュペリによって書かれ刊行された「星の王子さま」は、今や世界中で翻訳されている。この「星の王子さま」は、主人公の僕がサハラ砂漠に不時着した時の話だ。その頃の僕は、心を許して話し合える友人もおらず、孤独だった。そんな時、僕は機関士も乗客も同乗していない飛行機で人が住んでいる所から千マイルも離れた砂の上に不時着してしまう。僕が途方に暮れて眠っていると、風変わりな小さな男の子に起こされた。「お願いです…

ぼくにヒツジの絵をかいて！」これが僕を起こした王子さまの言葉だ。ここから僕と王子さまの旅が始まる。この旅で僕は、忘れていた子供の心を思い出す。王子さまのおかげで。

私はこの「星の王子さま」を読んで、自分ではまだまだ子供だと思っていたけど、もう頭でっかちな大人になっているなあ、と思った。本の最初のほうに載っていた「僕のデッサン第一号」はぼうしにしか見えなかった。大人になりたくないな、と思っていたのに、子供の心を忘れてしまった。そう思って悲しくなった。ある日僕が王子さまを怒らせてしまった時があった。僕はエンジンの固いボルトを外そうとしていて、王子さまの「トゲはなんの役に立つの？」という質問に、ぞんざいに答えてしまった。それでもまだ質問を続ける王子さまに、僕は苛立ち「僕はいま、まじめなことに取り組んでいるんだ！」と言ってしまふ。私は僕の言っていることに間違いはない、あたり前のことだと思った。しかし、王子さまの言った言葉にどきんとした。

「ぼくは真っ赤な顔をしたおじさんが住んでいる星を知っている。その人は一度も花の香りをかいだことがない。一度も星を眺めたことがない。一度も人を愛したことがない。一度も計算以外のことをしたことがない。それで一日中、きみのようになりかえしているんだ。〈おれはまじめな男だ！おれはまじめな男だ！〉ってね。それで得意満面、大きな顔をしている。でもね、それは人間じゃない、キノコだよ！」

その言葉を読んで、最初はキノコというフレーズに笑ってしまった。だけど、よくよく考えてみると、王子さまの言ったのは極端な例だけれど、今の人達もそれに近いのではないか、と思った。やりたいこともなく、ただ言われるままに勉強して、何か大事なものを見落として、捨てて生きているのではないか、と思った。今私たちが大事だと思っていることが、実は全然そうではなくて、大切なことはもっと他にあると思った。1 + 1 = 2とかそういうことも生きていく上では知っておかなくてはいけないけれど、それがすべてじゃない。バラにはトゲがあるんだ。ヒツジは小さな木を食べるし、トゲのある花だって食べてしまう。こんなあたり前で小さなことを、王子さまは真剣に僕に聞く。私にとっては、あたり前で聞く意味なんてない、と思うことでも、本当は一番大切なんだ。数字しか見ていない大人にはとうてい理解できないことかもしれないけれど。でも、そうやって生きていくのは今の世の中では難しいと思う。小さなことに感動して、

驚いて、涙を流して。そういうことができる、キレイな心を持った人はあまりいないと思う。だって私は、王子さまが言った言葉の半分以上の本当の意味を理解できていないのだから！ 何度も何度も読み返して、頭をひねって考えたけれど、王子さまの言葉は簡単なようで難しく、充分大人に近づいてしまった私は理解に苦しんだ。王子さまが彼の星へ帰ってしまう日、彼は僕に、

「きみは夜、空を眺めるだろう。だって、星の一つにぼくが住んでいて、星の一つでぼくが笑っているからね。そのとききみにとっては、星という星がみんな笑っているように見えるだろう。きみはね、笑うことのできる星を持つことになるんだよ！」

と言って笑った。これは王子さまじゃないと言えない言葉だと思った。だって「星が笑う」なんて表現、思いつきもしない。王子さまは僕に、そして読んでいる私たちに、はっとさせるようなセリフを言う。忘れてはならない、と気付かせる。

この本を読んで、私も王子さまに会いたいと思った。それか、僕と会ってみたいと思った。きっと王子さまの言葉を彼も持っていると思うから。王子さまと別れた僕は、無事に生きて還った。そして著者は、この「星の王子さま」を執筆後、戦線に復帰し、偵察飛行中に行方不明になってしまった。もしかしたら彼は、王子さまに会いに行ったのかもしれない、と私は最後にそう思った。

エッセイの部

最優秀賞

私の小さな旅

電気情報工学科1年 松井 宇海

近頃私は旅に出る事が多い。何一つ持たずに駅に向かい、切符の自販機へ行くと一万円を突っ込んだのち、目を閉じて適当にボタンを押す。私はそれ迄全く行き先を知らず、指が何の気なしに選んだ場所へ向かう。その計画性のなさには一切の責任が存在しない為、何の気負いも無いのだ。日常に於いて責任を重んじなければならないからこそ、そんな無責任さは心地良い。だから私は今日も旅に出る事にする。今朝、

翳ったまま拭い切れなかった不穏感を忘れる様に、私は始発の電車に飛び乗った。指が導いた行き先は倉吉。私は倉吉の街に降り立ったと同時に、去年の旅から倉吉に足を運んでいなかった事を思い出した。倉吉は美しい街だ。白壁が街並みを鮮やかに縁取っている。去年の夏に倉吉を訪れた時も、太陽の日映い光と反射する白壁、そしてそれを彩る豊かな緑のコントラストに甚だしく感動したものだ。そのあまりにも美しい風景は、あつという間にグラスの中で薄く溶けた氷が舌の上で砕け散ってしまった時ほどに繊細だった。私はまるっきりの手ぶらのまま右のポケットにお金、左のポケットに携帯を入れ、白い街並みが続く坂を下ってゆく。そのまま、まっすぐ進むと酒蔵や醤油屋などの土蔵が見え始める。そこはもう何年も前に蔵としての機能を失っているものの、昔と変わらぬ蔵の形状を今も持ち合わせたままシックなギャラリーへと変化していた。中は郷土の産物などが並んでおり、今も変わらぬ昔ながらの風情を感じる事が出来る。そして昭和に息づいたであろう、あの古めかしくカビ臭いレトロな雰囲気漂わせるカフェも土蔵の一角に凛と佇んでいる。それは今も昔も変わらぬ古き良きものを私に肌で感じさせた。香ばしいコーヒーの香りを鼻腔から胸、体中にいっぱい吸い込みながら美しく白壁に沿って歩くと反対側には幅一メートルほどの川や柳の葉が風に添ってさらさらと流れており、私にべったりと張り付くまるでぬるま湯のような温度を幾ばくか緩和させていた。しかし次第にそのさっぱりとした空気も湿気をたっぷりと含み始めた。駅を下りて倉吉の街をあてもなく散策し始めてからすでに一時間がたった頃、水滴が私の鼻の頭に落ちてきたのだ。けれども私は歩みを止めはしなかった。雨が降り始めても雲と雲の狭間に太陽が出たまま、未だ白壁を照らし続けた。私は雨に打たれながらただ歩いた。髪に雨粒を滴らせながらただ歩き続けた。とにかく歩き続ける事だけがその一瞬の私の楽しみだったのだ。頭のとっぺんから足の爪先までしっとり濡らしながら、降り注ぐ日の光を仰ぐ。そうして白壁と細い川、柳道が終わりに差し掛かる頃、すっかり雨はあがっていた。目映い光を地上に贈ると共に艶やかな街並みを一層輝かせながら控えめに降ったそれは、天が気まぐれに誘った通り雨だったようだ。私はようやく駅へ辿り着いた。駅で私は白いシフォンのロングワンピースを買って、雨水を吸い込んだ衣類を脱ぎ捨てた。白いワンピースを購入した時、隣には黒いワンピースもあり、きっと普段の私なら間違いなく黒を選んだだろう。けれど太陽が私を包み込んだ様に、私は白いワンピースであら

かな気持ちを包み込んだ。それから待つ事五分、電車が私の前に現れ、私の小さな旅は終わりを告げようとしていた。確かに旅自体は少ない時間で終わってしまったものの、この時の私は始発の電車に飛びのった時には想像できなかったほどの澄んだ気持ちであった。そんな幸せを包み込んだ白いワンピースは私の心をかき乱したり汚す事はなかった。

そうして私は早朝の空気のように清らかで瑞々しい気持ちを抱きしめながら帰りの電車へ乗り込み、倉吉をあとにしたのであった。

優秀賞

わさび

電気情報工学科1年 松本 凌

皆さんはワサビという調味料をご存知だろうか。寿司や刺身を食べる際には必要不可欠の調味料ということであまりに有名だ。また、みんなでご飯を食べるとき、大量に食べることによって大爆笑がとれる非常にオイシイものだ。そしてあまり知られていないが、防腐作用もあり夏場の弁当をおいしく食べるために一役買っている。ところで、いきなり何を言い出すのか、と皆さん思われていることだろう。その理由は至極簡単だ。何を隠そう僕はワサビが大好きなのだ。しかし今までこうして文章にする機会がなかった。なのでこの機会に、ワサビへの気持ちを形にして表そうと思いついた。

いきなり語りだすのもおかしいので、まずワサビについての基本的な知識を書こうと思う。

ワサビは、日本が原産で、アブラナ科だ。ワサビには沢山の種類があるが、ワサビ科ではない。奈良時代にはすでに食されていて、室町時代には調味料として、そして江戸時代には現在と同じように寿司やツバの薬味として使われていたようだ。このことから、ワサビが古き良き昔から愛されていたすばらしい植物だということが分かるだろう。ワサビの歴史は千年を超えるのだ。

また、僕達の食べているワサビは、一本の棒状のものをすりおろしたものだということは周知の事実だと思う。たくましい男が、金おろしでワサビをおろしている姿など、実に想像に容易い。しかし、実は金物で出来たおろし器はあまりよろしくない。ワサビは金物

を嫌うのだ。目の細かい、サメの皮で出来たおろし器を使うと良い。また、ワサビの根をおろすのだが、この根は外側が辛く内側は普通に食べられるくらいのもので、ワサビをおろすときには、この外側と内側を練るようにしっかりと混ぜると、ツーンとした辛味の中に絶妙の風味が生まれる。ただすりおろしてハイ出来上がり、ではワサビ本来の旨みを引き出すことなど到底出来ないのだ。

ではそもそも何故ワサビなんぞというものが好きなのか、と思う方は大勢いるだろう。そのすべての方を納得させるに値するほど高尚な理由はおそらく持ち合わせてはいない。好みの問題もあることだし、そんなことは不可能だ。それでも、少しでも共感してくれる方がいたら、僕はとても嬉しく思う。

まず、「わさび」というコトバの響きに、発音の良さに僕は惚れた。もともと三文字の言葉というものは語呂が良いと僕は思う。そして最後の「び」という濁点の付いた文字が、えもいわれぬ余韻を残しながら、三文字を締めくくる。なんともすばらしいとは思わないだろうか。また、そんな中に何となくクスツとくるものが、この言葉にはある。これは感性の問題かもしれないのだが、何気なく「わさび」という文字を見たとき、何か可笑しい気持ちが込み上げてくるのだ。そして改めて「わさび」とつぶやいてみて欲しい。何か今までと違った、どこか洗礼された美しい言葉のように聞こえないだろうか。そのイメージと実物のあの辛さとのギャップが、程よいユニークな感じをかもし出しているのかも知れない。

また、僕はあのワサビの在り方に惹かれているのかもしれない。例えばざるそばで考えてみよう。ざるそばの主役はもちろんソバだ。あのツルツとしたのどごしとコシ。愛好家も多いことだろう。しかし、ソバとワサビ。この二つを比べてインパクトの、個性の強いものはどちらだろうか。おそらくワサビだろう。ソバに限らず、大人でも涙ぐむあの辛さの前では、ほとんどのものが霞んで見えるくらいだ。

しかし、その有り余る個性を持ちながら、薬味や調味料として陰でソバを支えている。そんな在り方が、何だか格好良いと思ったのだ。ワサビは滅多なことでは主役にはなれない。罰ゲームのワサビまんじゅうでもない限り。しかし、それでも良いのではないか。主役を陰ながら支え、誰からの注目も浴びることはなかったとしても。ワサビを食べていると、そんな気がしてくるのだった。

ちなみに、あの昔ながらの駄菓子、わさびのり太郎は僕も大好きだ。昨今の原価価格高騰による値上がり

の荒波に負けず、定価十円を貫き通すその初志貫徹の姿勢には感服させられた。是非これからもその姿勢を守って欲しいと切に思う。皆さんにも、一度手にとってみて欲しいものである。手軽にわさびのすばらしさを味わえることだろう。

意味のあるもの

建築学科1年 安森 未央

出会いがあるのなら、別れも必ずやってくる。いつ、どんな時に会うのか、そんなの誰にもわからないし、どんな場所で、何をしている時に別れがくるのか、それだって知ることは出来ない。数々の出会いと別れを、どのように心で感じ、体で感じ、そしてそれらが自分にとって意味のあるものなのか、経験してみないとわからない。

どうして出会いは生まれるんだろう…どうして別れはやってくるんだろう…そんな事、考えた事もなかった。疑問にさえ思っていなかった。なのに…「大切な人との別れ」という、何ともいえない悲しみや、寂しさと出会い、考えたくなくても考えてしまうようになってしまった。

そんな出会いなんていらぬ…あんな別れなんていらぬ…。そんな事を毎日毎日思い続けた。

本当は、うすうす気付いていたのかもしれない。その人を失うなんて考えたくなかったのかもしれない。

その人は、長い間、闘病生活を送っていた。何度も何度も入退院を繰り返し、一日のほとんどをベッドの上で過ごしていた。

「検査入院だから。すぐ帰ってくるよ。」

そう言い残して、家を出た。なのに、何日待っても、何週間待っても何ヶ月待っても、帰ってくることはなかった。寂しくて、心配で、不安だった。お正月も、誕生日も、クリスマスも、一緒に過ごせない。月に一度だけの、家で過ごせる大切な時間も痛みになされ、薬の副作用でボロボロになり、それでも必死に笑顔を作る姿を見るのがつらかった。ときどきふと悲しそうな表情をしている姿を見ると、心が引き裂かれるように痛かった。月日がたつにつれ、細くなっていく体。治療が進むにつれ、なくなっていく笑顔。光を見ることさえ拒んでいく瞳。そのどれを見るのも嫌だった。気を抜くと涙がこぼれそうになっていた。

いつしか、寂しさ、恐怖、不安、楽しさ、嬉しさ、そんな感情さえ感じなくなっていた。毎日が「無」

だったし、心の中は空っぽだった。なんで自分だけつらい目にあって、こんな思いをするんだろう…と自分の人生を恨んだ。楽しそうにしている人達を見るたびに、心が苦しくなっていた。

今思えば、自分の幼さがよくわかる。その人の気持ちも理解できるようになってきた。それが良い事なのか悪い事なのかはわからない。だって、後悔もたくさんあるから。してあげたかった事が、数えきれないくらいあるから…。そして、ある日突然、その人は、私の大切な人は、天国へと旅立っていった。いままでお世話になったのに、「ありがとう」の一言が言えなかった。突然の出来事に、涙も出てこなかった。信じたくなかった。

一人になった時、はじめて実感がわいてきて、布団の中で大泣きしたのを覚えている。頭の中では、たくさん思い出がよみがえってきて、楽しかった事、嬉しかった事、悲しかった事、つらかった事がたくさんあることに気付いた。大切な人との思い出が、たくさんあることに気付いた。

今はもう、あの笑顔も、あの声も、あの姿も見事はできないけど、たとえ薄れていったとしても、思い出だけは大切にしていきたい。それも、私の大切な人との出会いがあったという証拠だから。

これからも、たくさんのお出会いと別れがあると思う。たくさんのおつらさ、苦しき、そして楽しき、嬉しきを経験すると思う。

だけど、そのすべてに意味があり、何かしら影響をうけると思う。それが物であっても人であっても、一つ一つを大切にしていけないといけないと思う。

私は、失うのが怖い。大切な人がなくなる事が、失ってしまう事がとても怖い。だけど、怖がっているだけでは、前に進む事はできないと思うし、いつか後悔する事になるだろう。そうならないためにも、私は「出会い」を大切にしていきたい。いつかは別れがくるとしても、大切な人との思い出をたくさんつくっていききたい。

私はあの時の「別れ」を経験して、新たな「出会い」があった。その出会いは、私にとって嬉しいものではなかった。むしろ、嫌な出会いだったかもしれない。

でも、出会ってなければ出来なかった事、出会ってなければ、感じる事なかった感情をたくさん経験することができた。

無駄な出会いなんてないと思う。無駄な別れなんてないと思う。一つ一つに意味があり、影響をもたらすものだと思う。

だから私は、いままでの出会いや別れ、そしてこれから経験する出会いや別れを大切にしていきたい。

佳作

ライバル

機械工学科1年 福本 千等

今年の八月七日から十五日までの九日間、生まれて初めてのバイトをした。バイト先は「Aコープ」。友達二人と僕の三人でバイトをすることになっていた。

初日、Aコープの店長さんから言われた職場は三人別々だった。青果・精肉・鮮魚のうち僕は鮮魚へ行くこととなった。そこから長い九日間が始まった。

まず、鮮魚で言いわたされた仕事は商品のパックだった。次々とトレーにのせられていく魚介類を特殊な機械でトレーごとラップシールを貼るのだ。スーパーの商品棚に並んでいるアレである。簡単のように見えて、いざやってみると意外と難しかった。初心者がやるとどうしてもシワが寄ってしまうからだ。従業員のおばちゃんが、

「兄ちゃん、よく見ときな。」

と言って見せてくれたやり方の手本は、本当に見せる気があるのかと思うほど、尋常ならざるスピードだった。僕がキョトンとしていると、今度はゆっくり解説つきでやってくれた。最初のはともかく、いいおばさんであることが判明した。そして、一応やり方を覚えた僕ははいよいよトレーを手にした。自分がラップしたものが店頭には並ぶのだから、それを考えると少し緊張した。トレーの中には巻き貝が何個も並んでいた。ラップを引っ張りトレーを包んだ。と、同時に貝の先端がラップを破っていた。そう簡単にいかないのが人生。全くその通りだと思った。

九日間の給料は三人一緒の値段にはならない。時給六五〇円。働いた時間が多いほど給料は増える。となれば、三人はすぐにライバルになった。少しでも多く働く事が第一だった。誰かが頑張っていると自分も頑張らないと不思議と思えた。お金うんぬんじゃなくて、競い合うことで何事も成長していくのかとバイトを通してふと思った。そう考えると、ライバルもなかなか大切な存在だなと思えた。でも、決して成長させてくれることはないライバル達が二日目以降、頻繁に出てくるようになった。

そいつらの名前は、ハタハタ・メバル・平家ダイだった。そいつらはラップの時に容赦なく襲ってきた。別に生きていたワケではない。どういうことかと言うとトゲだ。エラやヒレなどに鋭いトゲがあったので何箇所も指を切るハメになった。中でも、何かと引っかかったのが平家ダイだった。平家ダイは他のタイとは明らかに違って、トゲも多くどこか豪華だった。が、何故「平家」なのか。別に源氏の方が好きとかいうワケじゃないけど何故か気に食わなかった。そういうワケで、そいつらは晴れて魚介類からライバルへと昇格した。

エライことも多かったけど、楽しかったことや学んだことはそれ以上に多かった。商品の整理や入れ替えなどをする事も多かったのでお客さんと接する機会も多かった。そこで、仕事に不慣れな僕に温かく接してくださる人の多さと心遣いに感動した。お客さんの質問や要望に応えることができたとき、お客さんにありがとうと言ってもらえるだけでとても嬉しかったし、それだけでいつまでも頑張ると思った。そこで僕は人の為に働く喜びを教わった。

温かく接してくれたのはお客だけではなく。店の従業員のみなさんにも良くしていただいて、楽しい毎日がすごせた。

そうこうするうちに、あつという間にバイトの最終日はきた。最終日もそれまでの日々と変わらず忙しくすぐに終了時刻の五時が近づいてきた。たくさんの人達に、ありがとうとか、また来てよとか言われると凄く達成感というか、やりとげた嬉しさが込み上げてきた。

この九日間とても貴重な体験ができたし、お金より大切なものをたくさん得た気がした。Aコープの皆さんにはとても感謝している。

「店内の整理をしておいで。」

と言われたので、バイトの最後の時間までは店の中を歩いていた。歩きながらバイトの最後を飾るにふさわしい仕事を探していると、ふと平家ダイが目に入った。売れずに棚のすみに一匹だけ残っていた。僕は競い合うようにと祈りを込めて、同じくお菓子コーナーで売れ残っていた、おそらくライバルであろう、「源氏パイ」をそっと隣に並べてAコープを後にした。



社会問題について思うこと

電気情報工学科1年 上本 光太

今から約140億年前に、ビッグバンとよばれる大爆発によって、小さな宇宙が誕生しました。その小さな宇宙は膨張を続けて、今日の広大な宇宙となりました。

約40億年前には、海中で生物が誕生したと言われています。それから長い年月を経て、約500万年前に人類が誕生しました。しかし、その人類は今、宇宙誕生から140億年かけて作りあげてきた大切な環境を破壊しようとしています。日本、アメリカをはじめとする先進国では、めざましい工業発達による水質汚濁や森林伐採、大量消費、大量廃棄など沢山の問題をかかえています。また、発展途上国では飢餓や貧困、紛争により、沢山の命が失われています。カンボジアでは、独裁者ポル・ポトによる政権下による内戦で、およそ200万人とも言われる途方もない規模の大虐殺が行われました。その時の影響で今もカンボジアには、沢山の地雷が埋まっており、沢山の子ども達が犠牲になっています。こういった数々の問題の中には、ある共通点があります。それは、すべて人類の不必要なまでの欲望です。人類は豊かさを求めすぎたがために、周りが見えなくなり、大切なモノを沢山失っています。

先進国では、毎日ご飯を食べる事ができ、学校にも通う事ができます。道端でのどがかわいても自動販売機やコンビニが沢山あるのでいつでも飲み物を買う事ができます。一家に一台以上車があって行きたい場所まですぐに行けます。こんなに不自由なく暮らせれば十分だと思います。なのに、食べ物を残したり、すぐに物を捨てたりしています。発展途上国では、飢餓などにより明日生きるか死ぬかという生活を送っている人が沢山います。そういった生活を送っている人達のことを考え、もっと物を大切にしたり、食べ物を残さずに食べるべきだと思います。そういった行為は直接的にはその人達のためにはならないけれど間接的に必ずためになると思います。

世の中には、いろいろと解決すべき問題が沢山ありますが、今もっとも注目し、そして対策をねらなければいけないのが地球温暖化です。二酸化炭素やフロンガスなどの温室効果ガスにより、温度が上昇していくのが地球温暖化です。温暖化により、砂漠化や水資源の枯渇、海面上昇などの被害がでています。

海面上昇で特に被害が大きい国は、太平洋に浮かぶツバルです。ツバルは海拔が低いので、潮の高いとき

には地中から海水が湧き出し、畑を侵食して作物が被害を受けています。また、井戸の水が淡水から塩水へと変化しつつあります。他にも、砂浜が削られる、海岸の植物が倒されるなどの海岸浸食も進んでおり、国の存在そのものがおびやかされかけています。このような被害をくい止めるには、一人ひとりが節電などの省エネに取り組んでいかなければいけません。海面上昇の他にもヒートアイランド現象というものがあります。ヒートアイランド現象とは、冷房や車の排気熱などにより、夏に周辺気温が数度高くなることで、等温線に書くと都市部が島の形に似ていることからそう呼ばれています。この現象により、1990～2100年までの間に1.4℃～5.8℃平均気温が上がると予測されています。ヒートアイランド現象は、現代社会においてくい止める事が難しい問題だと思えます。特に都市部では地面のほとんどがアスファルトでおおわれ、ビルが密集しており温かい空気や熱の逃げ場というものがないからです。

世界にはかぞえ切れないほど沢山の社会問題が溢れています。しかし、そういった問題をのり越え、解決していくことで新たな社会が形成され、歴史が刻まれていくと思えます。また、一人ひとりが社会問題にもっと目を向け、真剣になり解決策をみちびきだすことがとても大事だと思えます。まず、ちょっとした小さなことからはじめ、先進国の人達が発展途上国の人達を後押しできるような世界になったらもっと皆が幸せに、平和に、きれいな環境で暮らしていくことができると思えます。

今を生きる

物質工学科1年 福本 友法

タイムマシンがあればなあと、考える時がある。遊ぶことしか考えなかった小学生時代を思い出す。もっと勉強しておけば、苦勞しなくてすんだのに。中学生時代、部活で全国大会へのキップをかけた試合。今の自分だったら勝てるのに。あのときに戻ることができたらな、と何度考えたことか。無理なことだとは分かっている。しかし、なぜこのような非現実的なことを考えてしまうのだろうか。それを考えてみたいと思った。

考えた。ひたすら考えた。そして一つの考えにたどりついた。それは、失敗があるからだ。そう考えたのには理由がある。

中学生になると、新しく英語という教科が基本授業として追加された。日常生活の中で、ほとんど関わりの無かった英語。全くと言う程、授業についていくことができなかった。

三年生になってまじめに勉強を始めるが、とても苦しんだ。一年生のころからまじめに勉強しておけばよかったなと思う。後悔をした。苦しみから逃げたくて、タイムマシンがあればと思ってしまうのだと思う。これが自分の考えだった。

ある日、何気なくテレビをつけると、ドキュメントドラマをしていた。内容は、幼いころから大きな病をかかえている子供の話だった。いつ死ぬのか分からない病なのだそう。しかも、記憶障害もかかえていて、昨日のことすら忘れてしまう程の障害だった。

この子供は言った。

「自分は、いつ死ぬのか分からない。昨日のことも思い出せない。とても怖い。だけど、自分はまだ生きている。いや、生き続ける。今自分が生きているこの時を大事にしたい。そして、死ぬときも笑っていたい。」

この子供の言葉を聞いたとき、今まで自分が考えていたことが、どれだけくだらない考えかを気付かされた。この子供は、今を精いっぱい生きている。病をかかえていながらも、今を生きようとしている。とても感動した。

この子供に過去はない、覚えていない。とてもつらいだろう。苦しいだろう。しかし、子供は逃げないで病と闘っている。

過去をくやんでもしょうがない。今を生きる。本当にこの子供の考えには感動した。

今、自分は健康で未来がある。しかし世界にはあの子供のような、いつ死んでもおかしくないような人もいる。今を生きれる自分が幸せだと思う。病で死ぬ人達の分まで精いっぱい生きていきたいと思った。

では、精いっぱい生きるということはどのようなことなのだろうか。自分の日常をふり返ってみる。

とても退屈な日常だった。平凡な日が続く、退屈極まりないだけの日常だった。朝起きればいつものように鳥がさえずり、虫が奏でる音が聴こえる。嫌々ながらも布団からでてそのまま顔を洗って居間に向かって朝ごはんを食べて制服に着がえ、慌ただしく家を飛び出す。そして、毎日のように一時間弱汽車にゆられる。本当につまらない日常、変わりばえのない日々。明日を生きるために、そして後悔をしないために毎日を精いっぱい生きる人、つまり今という時間を大切にしている人もいれば、自分のように過去にすぎり、

今という時間を無駄な時間としてすごしている人もいる。快適に生きていくことにあきてしまったのかもしれない。しかし今、病をかかえ、今を精いっぱい生きている人が世界にたくさんいるということを知る。そこから少しずつ自分の日常が変わっていく気がした。

タイムマシン。確かにそれがあれば、苦しむことはない。後悔することも無くなるだろう。しかし、後悔の中で、苦しみの中でも何かを学べる、発見できることを知った。今を精いっぱい生きる。まだよく分からないが、自分の人生に悔いが無いように生きていきたい。簡単にはできないが、今自分が生きる意味を見つけることができた。たった一つのきっかけによって。人生はまだ捨てたものじゃない。

エコとの関わり —上手なエコー

建築学科1年 原田 小鈴

最近、エコについて呼び掛ける番組やCMをよく見かけるようになりました。その中で私の一番目につくCMがコンビニで買い物袋を断るCMです。私がこのCMを初めて見た時、ドキッとしてしまいました。理由は、私がいつもコンビニ等に行く時、かばんを持っているにも関わらず毎回買い物袋をもらってしまうからです。いつも断ろうとするのに断れないのです。私は、なぜそうなるのかをある日考えました。そして、原因を二つつきとめました。一つ目は、勇気が足りないということです。ただ一言「買い物袋はいりません。」と言うだけなのに、それが出来ないのです。口からいつも言葉が出ようとするのに、それはいつものどの奥でとどまって、気がつけばいつも片手にビニール袋を持っています。そして、最後の一つは、なれというものです。昔はエコバッグをつかいましたという呼び掛けが無かったせいか、私の中で買い物をして、買い物袋をもらって店を出るという一連の動作をすることが当たり前になってしまっているんだと思います。当たり前のことを変えることはそう簡単なことではありません。でも、どうにかして改善しなければなりません。

そんな時、私はアーティストさんたちがエコに対してしている運動がかかっている冊子を目にしました。その中に、とあるアーティストさんが

「大きなことでなくて、小さいことから始めていければと思っています。」

と言っていたのです。まわりの人達にとって、買い

物袋を断ることはとても小さなことだと思います。しかし、私にとってはそれがまだまだ大きなことだと思います。私がいっつもしていることをちょっとずつ広げていけば、それは大きなエコになると思います。

外に外出するときに抜くコンセントを、寝る時にも抜くだけでエコになるのではないですか？エアコンを使うのをやめて窓をあけるだけでエコになるのでは？こう考えると、とてもとても小さなことでもエコになっているんだと思います。小さなエコをちょっとずつしていけば、それは必ず大きな結果となって私たちに返ってくると思います。それに、小さなエコが自分に身についてくれば、自然と大きなエコができるようになると思います。

小さなエコを毎日継続することも、いつかは面倒になってしまう時もあるかもしれません。しかし、それでもあきらめずにくじけずに自分のやれることをせいっぱいすることで自分のためになるし、力になるし、地球を温暖化という最大の敵をくいとめられると思います。

毎日何気なく見ているテレビCMで、こんなにエコについて考えることができるんだと少し感心しました。私以外にも、何気ない場面でエコについて考える人がいるのかなと考えると、なんだか心強くなってきます。エコとの関わり方をうまくすることが自分の第一歩になると思いました。

エコとの関わりをうまく、良くしていくことで、人との関わりも強くなっていくのではないかなと思います。理由は、エコをするにあたって、ビニール袋を断るときにしっかりと

「袋はいりません。」

と声を出せば、相手の人もしっかりとわかってくれるし、安心すると思います。

エコが本当にしっかりとできるということは、人とのつながりを強くしていくことができるということだと思います。まわりの人たちとお互いに声をかけあっていけば必ず、本当のエコができると思います。

小さなエコをやれば、いつかは大きなエコに発展していくと思います。そして、人と協力しあうことで、それはもっとエコにプラスされていくと思います。



新着図書紹介

学生による ブックハンティングより

- 千利休：「侘び」の創造者 湯原公浩編集
- Sweet blue age 有川 浩ほか
- ビギナーのためのGIMP2：「基本機能」「フォトレタッチ」から、「イラスト」「ロゴ」の作成まで！
Kome;DO NOT EAT著
- 麻生太郎の原点：祖父・吉田茂の流儀 麻生太郎
- π の歴史
ペートル・ベックマン著、田尾陽一・清水昭光訳
- 世界の建築家581人 ギャラリー・間企画・編集
- NEW&BASIC GRAPHIC DESIGN：デザインの進化形
ELLEN LUPTON著/JENNIFER COLE PHILLIPS著
菊池由美訳
- 五重塔はなぜ倒れないか 上田 篤編
- 骨から見る生物の進化
ジャン＝パティスト・ド・パナフィユー著
パトリック・グリ写真、グザヴィエ・バラル編
吉田春美訳
- ショートソング 栞野浩一
- いっちゃん 畠中 恵
- 自由と繁栄の弧 麻生太郎
- その日のまえに 重松 清
- 負ける建築 隈 研吾
- 別冊図書館戦争 有川 浩
- ドライブイン蒲生 伊藤たかみ
- モーツァルトとクジラ ジェリー・ニューポート
メアリー・ニューポート、ジョニー・ドッド著
八坂ありさ訳
- スノードーム アレックス・シアラー著、石田文子訳
- ラブコメ今昔 有川 浩
ほか

各科・一般科目推薦図書

一般科目

- 存在の耐えられない軽さ（世界文学全集1-3）
ミラン・クンデラ
- 理想の国語教科書 赤版 斎藤 孝
- 等身大のグローバリゼーション
オルタナティブを求めて国際比較研究叢書1
中村則弘・栗田英幸
- いま、すぐはじめる地頭力 細谷 功
- 「世間」論序説 阿部謹也
- 技術者のための微積分学 上野建爾 監修
- なっとくする演習・行列ベクトル 牛瀧文宏
- 銀河－ハッブル宇宙望遠鏡がとらえた驚きの宇宙
宇宙に浮かぶ不思議な天体 沼澤茂美・脇屋奈々代
ほか

機械工学科

- 弾性力学入門 基礎理論から数値解法まで 竹園茂男 他
- 再入門 材料力学 基礎編 沢 俊行

電気情報工学科

- CMOSの基礎と活用ノウハウ 大幸秀成
- アナログLSI設計の基礎 渡辺 嘉二郎・中村哲夫
- わかりやすいアナログとデジタル基本・応用回路入門
相良岩男
- 図解 わかりやすい液晶ディスプレイ 北原洋明
- MATLABプログラミング入門 上坂吉則
- スイッチトキャパシタ回路 武部 幹
ほか

電子制御工学科

- ブレイン-マシン・インタフェース最前線
－脳と機械を結ぶ革新技術－
櫻井芳雄・八木 透・小池康晴・鈴木隆文 著
- オペレーティングシステム 松尾啓志
- 線形離散時間システム入門 大野修一
- CMOSアナログ回路入門 谷口研二
- マイクロプロセッサ・アーキテクチャ入門
中森 章
- 近赤外分光法 尾崎幸洋・河田 聡
- プログラムを作ろう！Microsoft Visual Web
Developer 2008 Express Edition入門 矢吹太郎
- 機械系教科書シリーズ21 自動制御 阪部 飯田
- 集積回路工学2新版（2）（大学講義シリーズ）
永田 穰・柳井久義
ほか

物質工学科

- 絶対わかる分析化学 斉藤勝裕・坂本英文
- ベーシック分析化学 高木 誠
- これならわかる分析化学 古田直紀
- 量子化学—基礎からのアプローチ 真船文隆
- 物理化学のしくみ（図解雑学） 齋藤勝裕
- 新・微生物学 別府輝彦
- 現場で役立つ食品衛生微生物Q&A 2版 小久保弥太郎
- バイオプラスチックの高機能化・再資源化技術
ほか

建築学科

- つくる図書館をつくる
伊東豊雄と多摩美術大学の実験
- 谷内田章夫／集合住宅を立体化ユニットでつくる
谷内田章夫／ワークショップ
- 図解 古代ギリシア ステイーヴン・ピーステイ
- 欠陥住宅をつくらない施工会社を見つける方法
カ石真一
- 日本の近代化遺産 北河大次郎
- インサイダー ビジュアル博物館 全12巻
- 気候学の歴史 吉野正敏
- ニュー・ミュージアム 現代美術・博物館の旅
ミミ・ザイガー 著、松岡智子訳
ほか

学生図書委員の活動



彦名保育園での本の読み聞かせ



ブックハンティング



高専祭での本を読む会



高専祭での古本市



情報教育・情報ネットコーナー ～利用マナーについて～

端末室の利用に関して、マナー違反が頻発しています。例えば

- 1：端末の終了動作を確認せず退席している。
- 2：演習机上に「消しゴムかす」を放置している。
- 3：端末室での飲食は禁止であるにも関わらず、飲料などの空き缶・空き袋が机上に放置されている。
- 4：端末室用の内履スリッパを、使用後片付けていない。

更に、悪戯と断言できる事例も発生しています。

- 5：LANコネクタ、キーボードコネクタ、ディスプレイ電源コネクタを半挿入にする。
- 6：キーボードのキーキャップを入れ替える。

端末室は共同利用施設です。後の人が気持ちよく使えるよう、マナーは守りましょう。悪戯に付いては、言語道断です。学校は何をするところか、よく考えて行動するようお願いします。

